

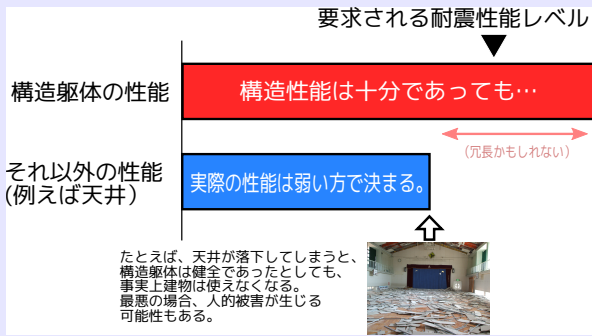
# 最小限界構造安全性能を有する建物を実現できる技術

伊山 潤 (東京大学)

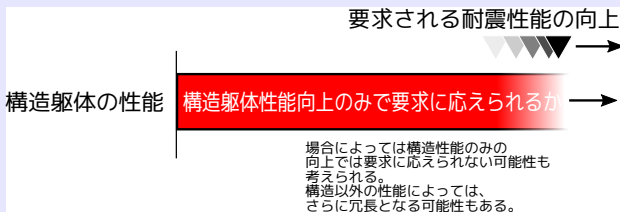


## 1. 背景

- 構造躯体性能よりも、他の要素（非構造部材、設備機器、継続使用性など）により建物寿命や性能が決まることも多い。

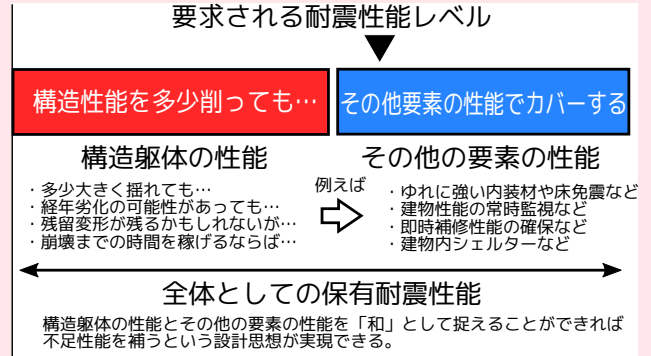


- さらに大きい地震への対策が求められてきている。

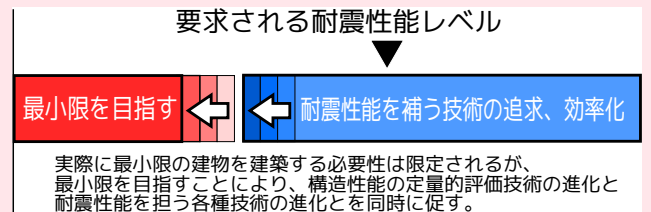


## 2. 解決方法

- 構造躯体性能を適切に評価するとともに、その不足を補う技術を開発する。

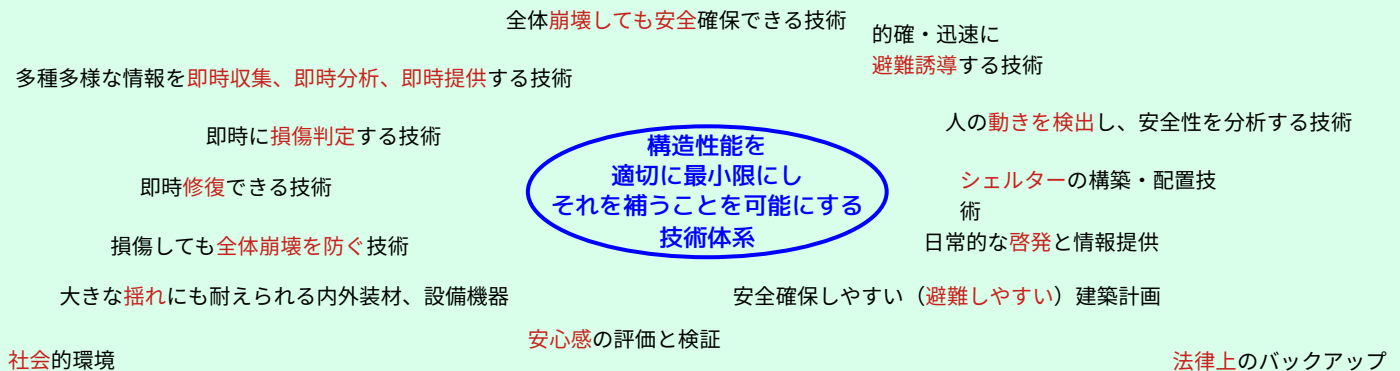


- 構造性能を最小とすることを目標とする。



## 3. 求める技術の全体像

- 建築構造分野においては、最低限必要な、全体崩壊を防ぐ技術や、構造性能を高精度で定量的に評価する技術が求められる。
- 建築構造以外の分野においては、地震時の安全確保や機能維持、地震後の診断・復旧に資する技術を探求する。また各技術が有する耐震性能を定量的に評価する。



## 4. 研究会

趣旨・概要： 構造躯体、およびそれ以外の各要素・各技術が耐震性に貢献できる可能性について、多角的に整理・分析を行い、構造躯体のみによらない総合的な耐震性確保の実現に向けた基礎的な検討を行う。

関連業種： 設計会社、コンサルタント、ゼネコン、材料メーカー、センサ機器、情報通信機器メーカー等

研究会期間： 2020年6月～ 1年間(予定)